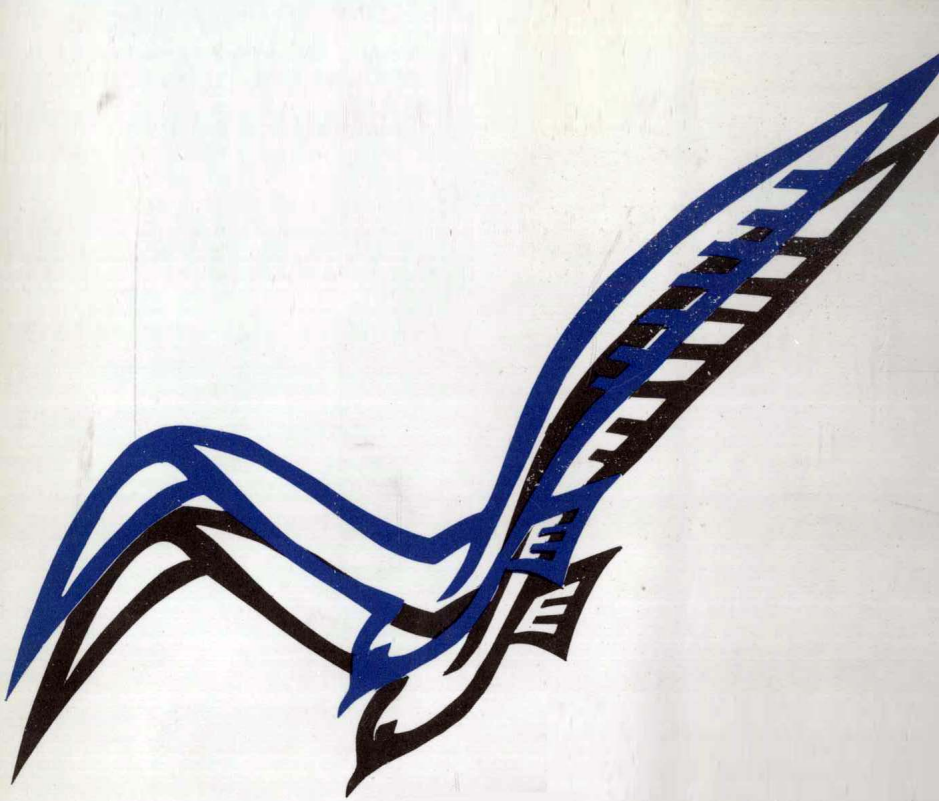
不良少女とよばれて

原 笙子

ちくま少年図書館40
心の相談室



不良少女とよばれて

原 笙子

ちくま少年図書館40
心の相談室

289／不良少女とよばれて

著者略歴

1933年京都に生まれる。大連（中国東北省）で少女期を過ごし，1947年に引き揚げる。新制中学卒。1955年より民間の舞楽指導者としての道を歩む。一男一女の母。著書に『山羊の目の先生』（筑摩書房）がある。

筑摩書房／1978年初版
233pp／18.8cm／四六判

1978年12月20日　第1刷発行
1983年9月20日　第8刷発行

著　者© 原（はら）　笙（しょう）　子（こ）

発行者　布川角左衛門

発行所　株式会社 筑（ちく）　摩（ま）　書（しょ）　房（ぼう）

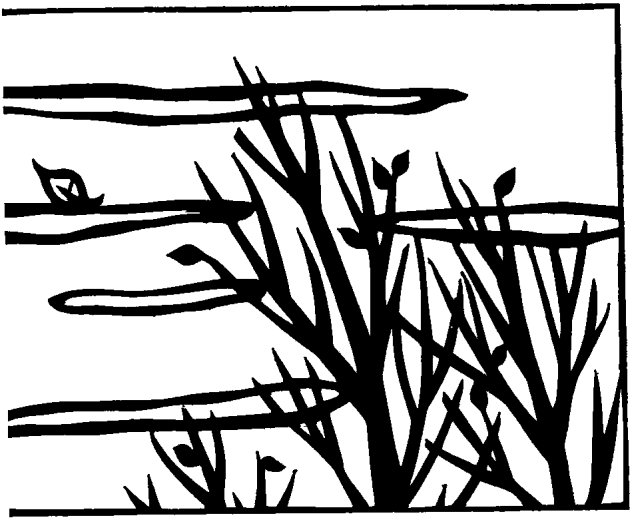
東京都千代田区神田小川町2－8
電話　東京（291）7651（営業）
（294）6711（編集）
郵便番号101-91　振替東京6-4123

Printed in Japan　厚徳社印刷・和田製本

（分類）8093（製品）04040（出版社）4604

乱丁・落丁本の場合は，御面倒ですが，小社読書係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

不良少女とよばれて



もくじ

はじめに　5

第一部　大連の空の下で

女学校を中退する　11

くらしはわが肩に　29

身にしみる貧乏生活　71

第二部　不良少女とよばれて

日本への引き揚げ　95

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

父母の不和　114
家出・放浪をかさねる　147
施設でくらす　160
死への願望　176

第三部　ほんものの舞いにふれて

感動的な出会い　189
芸と家庭の板ばさみ　208
『エミール』に導かれて　220
あとがき　231

カット　阿部えり子

はじめに

八年前、読んでいたある本の中で、「不良というのもいいもんだぐらいは、なぜ息子(むすこ)にいってやれなかったんだろう」という一行に出会った。

本から目をあげた私は、そばの娘(むすめ)に問いかけてみた。

「かあさんを不良だと思う？」

小学校四年生だった娘は、あきれて笑いだしたが、私は思いきっていってみた。

「ありがとう……。でも、私には、不良少女ってよばれて苦しんだ時代があるのよ」

見かえす娘の真剣(しんけん)なまなざしにこたえて書きはじめたものが、この本になった。

夫と娘以外には伝える気持のなかった、私の戦後の半生記を、公開する決心をさせたものは、マスコミであつかわれる少年少女の非行問題だった。

私は、戦後の混乱期に家出をくりかえし、不良少女、親不孝娘とよばれていたころ、「おとなはへんだ、おかしい」と感じながら、うまくいい表わせぬために身をよじる思いを味わった。

三十年たったいま、「ちがう、そうじゃないんだ！」というもどかしい思いを、ようや

く書くことができた。

書いてみると、私が不良少女とよばれるようになった事情が明らかになった。それは、私個人の事情にとどまらず、非行のレッテルをはられて苦しむ現代の子どもたちも背負わされている事情に共通すると思う。

子どもが、非行少年・少女とよばれるにいたるまでには、さまざまな原因が秘められている。それは、氷山のかくれた部分のように、ひとびとの目にはなかなか触れることがない。

私の場合、それはこの本の第一部・大連時代が、そのかくれた部分にあたる。

ひとは、自分のことは飾って話したがる。つごうの悪いことはかくしたがる。だから、少年時代に非行のレッテルをはられて苦しんだ人間はおおぜいいるのに、自分ひとりの胸にしまって、あとから生きる者の役に立てようとする者はめったにいない。それは、すっかりかたまった傷あとのかさぶたを、もう一度引きはがして血を流すことだからかもしれない。

だから、非行が論じられるたびに、私は、三十年前の思いとはちがう別のもどかしさに身をよじる。問題を起こした少年の、まわりであがるおとなの声が、いつも少しずつピントがはずれているような気がしてじれったい。

レッテルをはられた少年たちは、自分でも、人間に非ざる行ないをしたと思いこんで、一生だめだとうちひしがれて生きることになる。

そうではないのだ。レッテルをはられなかった者も、まちがいを犯しながら生きているのだ。はられなかった人間も思いあがらずに、はられた人間もくじけずに、まよいをかさねながらも求めつづけ、いったんこれこそとわかったら、もうその道以外は歩けなくなるような、ほんとうの人間の歩く道を求めて生きてほしいと願ってこれを書いた。

この本を読んだあと、レッテルをはられた友だちを見る目の変わってくれることを念じつつ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

第一部

大連(だいれん)の空の下で

女学校を中退する

舞楽と私

娘が六年生のとき、「母には学歴がない。小学校の勉強しかしていないというが、堂々と、自信をもって生きている。それは、母には舞楽があったからだと思う」と作文に書いた。

六歳のときに始めた苛酷なけいこに、「なぜ舞楽をやらんならんの！」とベッドに伏して号泣した彼女。四年生のころには登校拒否というギリギリの手段で抵抗し、私に母親として家にいることを要求した娘だっただけに、「母には舞楽がある」と私を見つめてくれるようになったことは、母である私にとって感慨深いものがあった。

ここで、舞楽のことを知らない人のために、舞楽とはいったいどういうものか、かんたんに説明しておくことにする。

今から千二百年ほど昔。奈良時代に仏教とともに日本に伝えられ、笙、篳篥、龍笛、狛

笛などの雅楽器の演奏で舞う古典芸能である。広く雅楽ともいう。

現在は、宮内庁式部職の中に楽部が置かれ、楽師たちによって、国賓の接待や園遊会に舞われるほか、戦後は、定期的に春秋二回公演して一般に公開している。

そのほか、民間では、神社仏閣の大きな行事の中で舞われるといえばわかっていただけるだろうか。

私が舞楽とかかわりをもつようになったのは神社の宮司だった父の娘だったから。その父は、というと、二十歳のころ、笙を習うことをすすめられて、舞楽に縁ができたのだった。

神職のだれもが雅楽をたしなむというのではなく、父の場合は趣味としてかかわった雅楽が、いつのまにか人にも教えるようになり、そのころ私が生まれた。

だから、私が物心ついたころには、父の期待を背に、すでに指に琴爪をはめられて琴を習わされていた。

私が小学校二年の夏休みに、父が満州（現在の中国東北区）大連神社に舞楽の主任として招かれたので、家族五人で京都から大連（現在の旅大）に渡った。大連神社の春秋の大祭には、父が教えたおなじ年ごろの子どもと舞台に昇ったが、右を見たり左を見たり、カンニングのしたいほうだい、とくに舞楽をすきともきらいとも思わなかった。

一九四五年（昭和二十年）八月十五日は、前の年の十月に父が宮司となって赴任した関水

神社で迎えた。

そこは大連の郊外で、渤海に面した低い山の中腹にあった。敗戦まで私は弥生女学校一年生として、軍事教練や農耕作業のあけくれだったが、神国日本の国柄を信じる体制の中で、神社はなにごとにも特別あつかいを受けていた。父は、日曜日にはゲートルを巻いて通ってくる学生を相手に、雅楽や日本画の手ほどきをして優雅にくらしていたし、私は、アカシヤ林の中で昼寝をたのしんで夏休みをすごしていた。

正午の玉音放送（天皇の声を送る放送）をきいた父は、こぶしでなみだをぬぐってくやしがったが、むりもなかった。いざというときは、かならず神風がふいて日本は勝つ、とかたく信じていた父だった。

窓から見わたせた漁業会社の中国人社宅の軒先には、ついさっきまでの日の丸の旗にかわって、中華民国の国旗、青天白日旗が、風にひるがえっていた。

運命の、百八十度転換を暗示していたとも知らず、父は単純にそのすばやい変身に腹をたてているだけだったが。

戦争に負けて、舞楽を舞う日がふたたび訪れるとは考えたこともなかったのに、意外にその日は早くやってきた。

私たちが関水神社から大連神社に身を寄せたとき、大連神社は、舞楽をソ連軍司令部の軍人たちに見せることで民間外交の場となっていた。

大連神社の神職は、舞楽の好きな宮司のもとに、なにかひとつ雅楽器のたしなみをもつ人たちが集まっていた。だから占領されてまもなくは、代わりあって演奏したり舞ったりしていたが、そんなことをしていては家族が養えないことがわかると、ひとり、またひとりと生活の糧を求めて町へ出て行ったので、すぐに上演にさしつかえるようになった。

そういうところに、私たちが大連神社にもどってきたので、待っていたように私は、「迦陵頻」「胡蝶」という子どもの舞（童舞という）を舞わされた。しかし、いつまでも童舞では見るほうもあきるだろうと、宮司と父は、子どもにおとなの舞う曲を教えることを思いついた。

おだてられるように、神職の子どもたちや、以前に教えた市内の子どもたちが集められ、つぎつぎに「万歳楽」や「延喜楽」という曲を、装束の袖を引きずって舞った。

ロシア人には音感にすぐれた人が多かったのだろうか。できばえのよい日は惜しみなく拍手を送るが、悪い日は、「ニエ ハラショ（よくない）」とくちびるをゆがめて手をたたかなかった。

社務所や社宅には、新京（現在の長春）や奉天（現在の瀋陽）からのがれてきた神職の家族の中に十七、八の娘が何人かいた。宮司と父は、その人たちに舞楽を教えて舞ってもらうことにした。

舞台のある参集殿で朝げいこが始まった。私は、「ごはんのしたくも手伝わないで……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c